



からしだね

2017年5月号
(527号)

キリストの受難 カトリック池田教会

共同宣教司牧：畠 基幸 神父・中村克徳 神父

住所：〒563-0041 池田市満寿美町9-26

TEL：072-751-2400 FAX：072-753-4624

URL(ホームページ)：<http://www.ne.jp/asahi/catholic/ikeda/church/index.htm>



本号の記事の主題など

中村克徳神父の巻頭言「わたしはあなたがたと 共にいる」……………2	黙想会に参加して(2)……………8
主の復活を祝う、洗礼式と初聖体……………3	アルファ・コースが始まりました……………9
四旬節黙想会 澤田豊成神父 「尽きることない命の恵み」……………4	五島列島巡礼記……………10
四旬節黙想会レポート……………6	池田・日生合同黙想会のお知らせ……………10
	回勅「ともに暮らす家を大切に」を読んで…11
	ダニエル神父の訃報に接して……………13

巻頭言

わたしはあなたがたと共にいる

中村克徳 CP

池田教会の皆さん、主のご復活おめでとうございます。今年の聖なる三日間(聖木曜日から復活徹夜祭まで)は天候にも恵まれ、満開の桜とともに恵みに満ちた過越しの神秘(キリストの死と復活)に与ることができました。池田教会で復活の主日を迎えたのは初めてのことであり、忘れることのできない復活祭になりました。

さて、わたしたちは主の復活という神秘をどのように理解しているのでしょうか。マタイ福音書によれば、イエス様が十字架上で亡くなられたのは金曜日の午後三時ごろです。イエス様は亜麻布にくるまれて墓に葬られました。ここまではどの福音書でも大きな違いはありません。しかし復活についての記述には、福音書ごとに相違がみられます。少し整理してみたいと思います。

マタイ福音書では、最初にマグダラのマリアともう一人のマリアが、空の墓にいた天使から主の復活を告げられ、その帰り道でイエス様と出会います。マルコ福音書では、マグダラのマリアとヤコブの母マリア、サロメが墓に行きますが、空の墓にいた天使からイエス様の復活を告げられるだけで、イエス様との出会いは記されていません。ルカ福音書でも、マグダラのマリア、ヨハナ、ヤコブの母マリアと他に複数の婦人たちが墓に行き、空の墓と天使から主の復活を告げられますが、イエス様との出会いはありません。ヨハネ福音書では、マグダラのマリアだけが墓に行き、空の墓を見て、ペトロともう一人の弟子にそれを伝えます。二人がイエス様の遺体がないことを確認して戻ってきてから、マグダラのマリアがもう一度墓に行ったときに、復活したイエス様との感動的な出会いが起こったことが描かれています。

こうして比較してみると、イエス様の復活にまつわる最初の証言で共通しているのは、墓が空であったというものです。墓の入り口に置かれた大きな石が取り除かれており、中にはイエス様の遺体を包んでいた亜麻布だけが残されていたという点です。次に、どの福音書も、最初に墓に行った婦人たちの中にマグダラのマリアがいたことを告げています。

ここから、復活の出来事の意味を考えてみたいと思います。マグダラのマリアが墓に行くのはイエス様を偲ぶためですが、それは過去の良き思い出に縛られていることの表れです。終わってしまった過去はどうやっても戻ってくることはありません。しかし墓が空であり、そこにイエス様の遺体がないということは、新しい恵みが始まっていることの証しなのです。過去に留まるのではなく、未来に向かって新たな一歩を踏み出す時が到来していることを告げているのです。

次に、マグダラのマリアと復活したイエス様との最初の出会いをみると、復活前と大きく違っていることが分かります。マグダラのマリアはイエス様を園丁だと思いました。約三年間も一緒にいてイエス様だと判別できないはずがないのに、イエス様が「マリア」と呼び掛けるときにはじめて、彼女はイエス様であることが分かったのです。ここに、復活したイエス様と出会うための重要なポイントがあります。第一に、イエス様は目の前にいるということです。それが見えないのは、自分の心の奥底にある扉が閉じられているからではないでしょうか。過去のイエス様の栄光を探し求めているだけでは、復活したイエス様を見ても気がつきません。幾ら苦しみもがいても、心の扉を開かない限り復活したイエス様と出会うことはできないのです。同時に、それは新しい信仰の恵みが与えられるための産みの苦しみでもあります。イエス様が意気消沈したマリアの名前を呼ぶと、彼女は途端にイエス様であることがはっきりと分かりました。マリアにとっての十字架の苦しみは取り去られたのです。

この出来事をわたしたちに当てはめてみると、気がつくことが出てくると思います。そう、わたしたちは復活したイエス様と出会っているのです。あるときは親しい人の姿で、あるいは電話で、街ですれ違う人や偶然の出来事の中に、復活したイエス様がおられます。そしてわたしたちを励まし、勇気づけ、答えを与えてくださるのです。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(マタイ28章20節)。主イエス・キリストの恵みと平和が皆さんの上にありますように。

主の復活を祝う



復活の聖なる徹夜祭に3人が洗礼式

4月15日夜の復活の聖なる徹夜祭はイエス・キリストが十字架上の死を遂げたあと、黄泉に下られたことを思わせる、暗黒の聖堂内で始まりました。そして福音朗読により、イエスの復活が告げられると、歓喜の歌声が堂内に響きわたります。わたしたちはこの喜ばしい記念の夜に3人の洗礼志願者を迎え入れました。畠神父様により洗礼式がおこなわれ、3人は池田教会の家族となりました。

初聖体、おめでとう！

4月16日の復活祭で、5人の少年が初聖体を授けられました。

初聖体の感想はさまざまで、おいしかったとか、味がしなかったとか言いながら、皆とても嬉しそうで、満面の笑顔でした。



尽きることのない命の恵み —洗礼の秘跡の豊かさを思い起こす—

四旬節黙想会 (2017年4月2日)

聖パウロ修道会 澤田豊成 司祭

ミサ説教(四旬節第5主日、ヨハネ11・1 - 45)

今日は四旬節第5主日です。四旬節の主なテーマは2つあります。一つは「回心」です。そして、これに結びつく「犠牲」、「節制」、「貧しさの意味」などです。

もう一つは「洗礼」です。四旬節は、直接には復活の主日に洗礼を受けることを望んで歩んでいる志願者が直前の準備をおこなう期間です。しかし、同時に、教会全体が新しい霊的家族を迎え入れ豊かにされるのを待ち望みつつ、彼らのために祈り、またすでにわたしたちが受け、そして今もそれに満たされているはずの洗礼の恵みの豊かさをもう一度思い起こす期間でもあります。すでにわたしたちが体験をとおして知り、生きていることを、洗礼志願者たちに証しするのです。彼らもそのように駆り立てられていくためです。しかし、人間は弱いものです。どんなにすばらしい恵みを受けても、時とともに、それは色あせていきます。深める努力をしなければ、なおのことそれは忘れ去られていきます。だから、四旬節にわたしたちはこの秘跡の豊かさとして決定的重要性を思い起こし、心に刻み直し、新たな豊かさを発見するのです。

特に、四旬節第3、第4、第5主日は、洗礼志願者のための典礼がおこなわれます。さらに、典礼暦年のA年、つまり今年、伝統的に洗礼志願者のための福音として読まれてきた箇所が朗読されます。イエスとサマリアの女性の対話(ヨハネ4・5 - 42)、生まれつき目の見えない人のいやし(ヨハネ9・1 - 41)、ラザロの復活(ヨハネ11・1 - 45)です。叙唱もA年のみ固有のものが用意されています。

典礼暦の視点から、教会がこれらの福音をとおして洗礼の秘跡の豊かさを示し、洗礼志願者を励まそうとしていることが分かります。サマリアの女性との対話では、イエスが「生ける水」(4・10)を与えてくださること、この「水を飲む人は、永遠に渇くことがない」(4・14)こと、それどころかこの「水は、その人の中で泉となって、永遠の命に至る水が湧き出る」(同)ことが宣言され、さらには「霊と真理」(4・23、24)と満たされ、神のみ心にかなう、「まことの礼拝をする者」(4・23)とされることが述べられるのです。しかも、この恵みを受けた人は、ユダヤ人と敵対していたサマリア人であり、しかも女性です。結婚関係の問題から、社会の中で難しい立場に置かれていた女性であることもうかがえます。にもか



かわらず、彼女は町へ行き、この喜びの出会いを人々に告知する者となります。

そして、生まれつき目の見えない人のいやしの物語では、目が開かれ、見えるようにされただけでなく、イエスを信じる信仰の目が開かれたことが宣言されます。見えないイエスの神秘を見ることができるようになったのです。「あの方が、わたしの目を開けてくださったのです。……生まれつき目の見えない者の目を開けた人がいるなどということは、いまだかつて聞いたことがありません。もしあの方が神のもとから来られたのではなかったなら、このようなことは何一つおできにならなかったはずです」(9・30、32 - 33)。「彼は、『主よ、信じます』と言って、イエスを礼拝した」(9・38)。社会的には「罪人」とみなされていたこの人も、イエスのこの恵みを受けて、ユダヤ人指導者たちの前で力強く信仰を宣言しています。

さらに、ラザロの復活の物語では、イエスを信じる者が永遠の命の恵みを受けることが、ラザロの復活をとおして、証しされます。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。生きていて、わたしを信じる者はみな、永遠に死ぬことはない」(11・25 - 26)。「マルタは答えた。『はい、主よ、あなたがこの世に来られるはずの神の子、メシアであると、わたしは信じております』」(11・27)。

わたしたちは、これらの恵みを洗礼の秘跡をとお

して受け、これらの恵みに今も満たされているのです。イエスは、わたしたちの中で尽きることのない水となり、命となっておられます。また、わたしたちの目をこの見えない恵みを見ることができるようになってください。だから、わたしたちは、霊と真理において、まことの礼拝をささげないではいけないのです。毎週、わたしたちがミサのために教会に集まるのはそのためです。ミサは、まさにこの恵みの頂点です。ミサの中で、わたしたちはこの恵みを記念し、わたしたちがどれほどの者とされたのかを思い起こし、再び、日常生活へと戻っていくのです。ついには、このことを常に意識しながら生きる者、すべての中に神の見えない救いの恵みとそのわざを見ることが出来る者となることを目指して。

妨げの中で

洗礼のこれらの恵みのすばらしさは、目に見えないがために、実感すること、実感し続けることが難しいものです。しかも、わたしたちの周りには、これらの恵みを妨げるさまざまな要因があります。そして、わたしたちはしばしばそのことに気づかずにいることも多いのです。ヨハネ4章、9章、11章は、このような妨げに気づいていくうえでも、役に立つ個所だと思います。

サマリアの女性は、最初からイエスの態度や言葉にとまどっているようです。「ユダヤ人のあなたが、サマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてくれとおっしゃるのですか」(4・9)。「わたしには夫はいません」(4・17)。イエスの答え、すなわち「あなたには五人の夫があったが、今は夫ではない。あなたは本当のことを言ったわけだ」(4・18)との言葉から類推すると、彼女はどうか結婚に恵まれず、5回結婚して、すべて夫に先立たれたのでしょう。周りは、彼女に問題があると考えていたことでしょう。もはや、結婚する決断もできなくなっていたのかもしれませんが。イエスは、明らかに周囲から距離を置こうとする女性のプライベートに踏み込んでいきます。人によっては、このようなイエスのなさり方を嫌がり、拒絶することもあるでしょう。しかし、女性はイエスを受け入れ、話を続けていくのです。こうして、イエスからの恵みがこの女性に与えられます。

生まれつき目の見えない人のいやしの物語でも、神の恵みとわざを認めようとしないう人々がいまいます。ファリサイ派の人々やユダヤ人指導者たちの一部は、自分の知識、経験から外れる、イエスのなさり方を認めることができません。いやしてもらった人の両親も、災難が自分に降りかかるのを恐れ

て、知らぬ、存ぜぬを通します。自分たちの子どもがいやされたという恵みを喜ぶよりも、厄介ごとに巻き込まれないようにすることに、力を注いでいます。それと比べると、いやしてもらった人の態度は際立っています。罪人と同類に扱われてきた人なのです。人々の前に立つのを避け、人ごみの中に紛れ込んで、隠れてしまうこともできたでしょう。しかし、彼はみずから進み出て証言します。指導者たちの前でも臆することがありません。自分が体験したことに基づき、そこに表れ出る神のわざを、ありのままに見つめようとしています。

ラザロの復活の物語では、イエスを信じているはずの人々にとっても、信じることは難しかったということが浮き彫りにされています。まず、イエスと弟子たちのやりとりは、信じて従っているはずの弟子たちの考え、心がいかにイエスとはかけ離れているかを示しています。マルタもそうです。マルタはイエスがメシア、神の子であることを信じています。しかし、イエスが何を言っても、ラザロは死んだという現実を前にすると、この見える現実を超えて、見えないイエスの力を信じることはできません。死という現実が重くのしかかるのです。「イエスは仰せになった、『あなたの兄弟は復活する』。マルタは言った、『終わりの日の復活の時に、復活することは存じております』」(11・23 - 24)。イエスが今おこなおうとしておられるわざではなく、世の終わりのことへと先送りして、なんとか考えをまとめようとするマルタの考え方が伝わってきます。それは、ラザロの墓の前でも同じです。「イエスが、『石を取りのけなさい』と仰せになると、死んだ人の姉妹マルタは言った、『主よ、もう臭くなっています。四日目ですから』。イエスは仰せになった、『信じるなら、神の栄光を見ると、あなたに言ったではないか』」(11・39 - 40)。

わたしたちは、このような妨げに打ち勝つほどに、洗礼の秘跡の恵みの豊かさを見つめ、これこそがすばらしい、選び取るべき恵みであると実感することが必要なのです。

イエスのなさり方

一人一人に向き合ってください。イエスのなさり方にも注目すべきでしょう。イエスは、弟子たちが食べ物を買って町に行き、一人残されたときを見計らって、サマリアの女性に声をかけられます。真昼間に町外れにある井戸に水をくみに来た女性には、どのような理由があったのでしょうか。イエスは、一対一で彼女に声をかけられます。しかも、彼女のプライバシーから始まって、神秘へと分け入っていくことができます。イエスは、最初

から生活とは無関係に思われる話をしたり、ご自分の素性を明かされたりはなさいません。

生まれつき目の見えない人のいやしの際にも、ご自分の素性を明かすことをしていませんし、いやしの意味を説明することもしていません。また、いやされた人がファリサイ派の人々の尋問を受けたり、その人の両親が審問されたり、いやされた人が再び尋問されたりする間、イエスはこの人にかかわろうとはなさいません。わざと距離を置いているかのようです。イエスが彼のもとに行かれるのは、この人が外に追い出された後です。しかし、それはただ放つたらしにしているということではなく、この人自身がみずからの体験を見つめ、イエスの神秘に自分なりにたどり着き、証言するようになるのを待っておられるかのようです。

ラザロの復活の際にも、イエスはラザロの病気の知らせを聞いてもすぐに動こうとはなさいませんでした。「イエスは、ラザロが病気であることを聞いてからも、同じ所になお二日留まられた」(11・6)。ラザロが亡くなった後に、イエスはベタニアに向かわれます。マルタとマリアの落胆は大きなものでした。「マルタはイエスに言った、『主よ、もしあなたがここにいてくださったなら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょう』」(11・21)。「マリアはイエスのおられる所に来ると、イエスを見るなり、足元にひれ伏し、『主よ、もしここにいてくださったなら、わたしの兄弟は死

ななかつたでしょう』と言った」(11・32)。しかし、それは一時的にマルタ、マリアらを悲しませることになったとしても、それが目的ではなく、彼女たち、そして弟子たちが信じて、神の栄光を見ることができたためでした。「ラザロは死んだのだ。わたしがそこに居合わせなかつたことは、あなた方のためによかつた。あなた方が信じるようになるためである」(11・14 - 15)。「信じるなら、神の栄光を見ると、あなたに言ったではないか」(11・40)。「あなたがわたしをお遣わしになったことを、彼らに信じさせるためです」(11・42)。

イエスのなさり方は、わたしたち一人一人への深い愛からほとばしり出るものです。民族、性別を分け隔てすることはなさいません。しかし、だからこそ、わたしたちが踏み込んでほしくない内面にまで深く入り込むものでもあるのです。それは、時に大きな痛みを伴うものでしょう。悲しみ、苦しみをもちたすかもしれない。そうかと思えば、イエスがわたしたちのそばにいてくださらないと感じられることもあるでしょう。自分が一人放り出されてしまったように思われることもあるでしょう。しかし、それはわたしたちの真の信仰の成熟を願ってのことなのです。わたしたちは、このイエスのなさり方を、神の愛と恵みとして受け止め、わたしたちも同じように生きることができるよう招かれているのです。

四旬節黙想会レポート

研修委員 廣瀬

今年は復活祭に4名の方が受洗されるのを予定する中、聖パウロ修道会の澤田豊成神父様をお迎えして、四旬節黙想会が行われました。

第1講話、第2講話に続き、畠神父様のご提案で第3講話として、赦しの秘跡を挟んで、おみどうからカール記念館に場所を移し、軽い食事をしながら神父様とわかち合いを行いました。

第1講話では神父様は、今年A年の四旬節第3主日、第4主日、第5主日のヨハネ福音書の朗読がとくに長いとされているけれども、ほかでもない、これらは洗礼志願者のための朗読であること、そしてこの三つの福音朗読をとおして、全教会が洗礼志願者をバックアップすること等々、そういったお話がありました。

その中でも、サマリア人女性が登場する福音朗読に象徴される「命の水」のみことばは、志願者たちが、洗礼の恵みに与ったあとも、日常の中に

ふたたび戻ったとき、ともすれば祈りや福音を遠ざけてしまいがちな時に、あらためて力を注いでくださる泉のようなものであるというお話でした。

そこでこの、私たちにとって「命の水」とは具体的に何なのか、「恵み」とは一体何なのか、そのことについて考えたいのですが、恐らくこれは、私は「救い」とは何かということにつながっている気がします。

いつも思うことですが、人の信仰には個人差があります。したがって、人によっては「救い」とは、神の国の到来、突然、天からまばゆいばかりの光が射ってきて、天使たちが舞い、ラッパの音が鳴り響くといった世界観をお持ちの方もいるでしょう。しかし実際には、むしろ日々の現実の中の苦悩から救われたい、そう考える人も少なからずおられるのではないのでしょうか。

では、「現実」とは一体何でしょうか。

たぶん、私たちを含む現代人全般にとって現実とは、「自分が相手について、他者について、物事について条件付けをすること」ではないのでしょうか。それは言い方をかえれば、「自分が見聞きするこ

と、あるいは目の前の人や事物を自分が気に入るか
どうか」です。その点では、もし自分が気に入った相
手に対しては笑顔になれるけれども、気に入らないと
口を閉ざすといったふうになる、そのような、言わば交
換条件的な相互反応を、現代人の私たちは毎瞬
間、毎瞬間、絶え間なくやりとりしている。そしてその
ことに疲れ切ったとき、そうした日常を私たちは現実と
呼んでいるのではないのでしょうか。

そういう観点から、当時のイスラエルの社会におけ
る人間どうしのあり方も、現代の私たちと共通する
ところがあったのではないかと、それについて見てみ
ると、例えば、律法学者といった権威やエスタブ
リッシュメントが存在する一方で、弱者や病人など
のアウトサイダーに対しては忌避するといった風潮
は、あの人は〇〇だからと、つい他者や相手を条
件付けて見てしまいがちな、現代社会と確かに似
ているところがあります。

そのように、今に通ずるイスラエル世界の中で、ユダ
ヤ人とサマリア人がちょうど疎外し合っていた時代
に、イエスがサマリア人女性に対して、水を求めて話
しかけられた福音の出来事をあらためて考えてみるこ
とには、一定の意味があるかもしれません。

そこで、ここでは福音の中のイエスが、現代に生きる
私たちの実存に語りかけるものについて、いくつかのパ
ターンに分類しながら考察してみたいと思います。

- A. 汝はサマリア人である。だから、話しかけなかった。
- B. 汝はサマリア人である。だけれども、話しかけた。
- C. 汝はサマリア人である。だから、話しかけた。

まず、Aはごく一般的な人の反応と考えられます。ま
た、ごくふつうの人でも多少、物事を考えることので
きる人なら、Bの選択をとる可能性がある。しかし、イエ
スはCの選択をとります。このことは真理だと私は思
います。このイエスのとった行動に、私たちは神性と超
越性を感じとることはできないだろうか。さらにそのこ
とは、四旬節第4主日と第5主日の福音に登場す
る、イエスのいわゆる奇跡についても同様のことが言
えるのではないかと、見ていくことにしましょう。

「彼は、視力を失っている。だから、目が見えない
はずである。」

これは、ごくありふれた人間の認識ですが、しかしイ
エスは、「彼は、視力を失っている」、だから、「見
えるようにする」ことを「決定」します。恐らくこの「決
定」がイエスの神性であり超越性ではないかとは、
考えることは出来ないのでしょうか。

したがって、「ラザロは死亡している。」だから、「生
きかえらせる。」

つまり、このイエスによる人間の決意や決断以上の、

ゆるぎない実行性をとおして、私たちは彼にその神性
を見出すことができるのではないかと思うのです。

また、そのことは私たちに「復活」や「永遠の命」に
ついて、同じように意識を向けることを促すかもし
れません。

「これは私のからだである。」このことがイエスによ
って「決定」(order)されたとき、無条件に「そうであ
る」ことを認知(acknowledge)し受け入れる
(accept)ことで、私たちは霊においてキリストと一
体となれるのだと思います。

では、この無条件に受け入れる態度は「救い」に
つながるのでしょうか。

手もとのOXFORDの希英辞書によると、新約聖
書の中の「愛」にあたるἀγαπή (アガペー) という
ギリシャ語のもとになる動詞 ἀγαπάω (アガパオ
ウ) には“(他者を)受け入れる”、“歓待する”と
いった意味があるようです。とすれば、私たちは物
事をオーソドックスに考えることも、時には必要な
かもしれません。

この復活祭で私たちは、洗礼を受ける洗礼志願者
や初聖体の子供たちとともに、キリストのからだである
パンをあるがまま信じ受け入れることで、主のご復活の
歓びに与ります。そして、キリストのように他者を受け
入れひとつになることは、澤田神父様の言われる「命
の泉」、さらには「救いの恵み」へと至るものであると、
今回の講話は語りかけてくるようでした。

第3講話(わかち合い)では、そんな神父様の
パーソナリティーにまつわるエピソードをとおして、
愛について、怒りについて、SNSやインターネットと
いった私たちをとりまくテクノロジーについて、ざっく
ばらんなお話がありました。

とくに、インターネットについては教皇様の例をあげて、
使い方次第でわれわれが上手にコントロールすれ
ば、有用なものになるという見解が話されました。

語学が堪能で、カトリック教会に対しても厚い熱意
をお持ちの神父様ですが、あえて自己のプライドを
捨て去り、私たち信徒の立場に歩み寄ることで、
その優しさが感じられた講話だったように思いま
す。赦しの秘跡も待ち時間が出るなど、そのことが
よく表れていたと私自身深く印象を持つことの出来
た黙想会でした。



澤田豊成神父黙想会に参加して

杉山直

4月2日の四旬節第5週ミサは復活祭直前の「黙想会」でした。聖パウロ修道会から澤田神父にお越しいただき、第一～三講話までお話いただきました。第一、第二講話に参加したので感想をお話ししましょう。

四旬節3～5週には洗礼志願者を特に念頭においた御言葉が準備されています。第3週はユダヤ人イエスに水を求められたサマリア女性の驚き、第4週はイエスの「治療」で目が見えるようになった男の喜び、そして第5週はラザロの復活です。いずれも救い主としてのイエスの力を語ります。不可能な現実をイエスが可能にする物語が中心ですが、もっとも私の印象に残ったのはラザロの死をめぐるマルタの「信仰」でした。復活をもちろん彼女は信じてはいます。でもいつのまにか活きた実体を失った言葉だけのものとなってしまっている。世の終わりに死者はいつせいに復活する、と聖書が語る「知識」としてはもちろん受け入れているのです。だが聖書のその言葉を、イエスがその瞬間に彼女の目のまえで死後四日たったラザロに現実におこなう、とは信じられなかった。

マルタは私たち自身です。私たちも聖書を信じてはいます。しかし私たちの現実に、日々働きかける神の力への信頼を、ややもすれば失いがちです。この世の生活がそうさせる。受洗当時のみずみずしい神への確信は現実生活の価値観によっていつしか色あせてオボロとなってしまいます。マルタの言葉とラザロの復活が教えるのは、私たちの日々の苦しみや悲しみを乗り越える力がイエスにはあることでした。復活祭を迎えるにあたり、イエスが私たちとともにおられることを新たに心に刻みたいものです。

四旬節黙想会の感想

辻

一番心に残ったのは、ミサを豊かにするために自分で工夫するという事です。ここという所に心をこめていく、というヒントも頂きました。日々新しいミサを通してキリストに近づいていくことや、またフランシスコ教皇の笑顔のように、神の子にふさわしい表情を頂くため、朝、鏡を見ることなど、未来への希望を与えてくれた黙想会でした。研修の皆様へ感謝です。

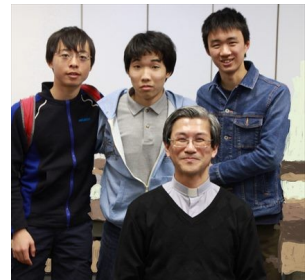
澤田神父は懇談会で

沢山の質問に応じられました

澤田神父様を囲んで、30人ほどがおにぎりをほおばった後、新しい試みとして、黙想会の第3部、懇親会が開かれました。

最初の質問は、お誕生日はいつですか、という高校生からの声で、それに続けて、どうして神父様になろうと思ったのですか、という率直な問いに、一気になごやかな雰囲気となりました。澤田神父様のお答えは、尊敬する兄が聖パウロ会に入ったので、真似をして入ったというユーモアたっぷりなものでした。

そのあと穏やかな笑顔を絶やすことなく、大人たちのさまざまな信仰上の質問に即座に明快に答えられ、その深い学識、判断力、知性に、一同おおいに感銘を受けたことでした。



アルファ・コースが始まりました

アルファ・コースも今年で10年目を迎えることになりました。下記に示しますように、昨年からは年齢に関係なく、どなたでも参加できるフリー・スクールとして開講しております。

イエスとは？、キリスト教とは？、聖霊とは？ 原点に戻って謙虚に学び直すことは私達にとって非常に大切なことではないかと考えます(知らなかったこと、忘れていたこともニッキー・ガンベル牧師が制作したDVDの教えの中には一杯あります)。

一方、Sr.渡辺和子の「キリストの香り」と「置かれた場所で咲くように」のDVDは人間として大切なことを教えてくれる最適の教材ではないでしょうか。

DVDを見、お茶を飲みながら感想を話し合ったり、互いの人生経験を語り合ったりするざっくばらんな分かち合いも、お互いの人生観を高め、少しでも心豊かに成長させてくれるものと確信します。

ご家族の中で、或いはお友達でイエスさまについてもっと勉強してみたいと思われる方、人間として少しでも成長してみたいと思って居られる方、大歓迎です。

夏休み、正月休み等も設けております。

人生にとってはほんの一時、皆さんと親しくお付き合いができればこんなに嬉しいことはありません。

気楽にご参加して戴ければ幸いです。ご案内申し上げます。これまでに受講された方も、復習の意味を込めての再受講歓迎します。

記

○開催日：平成29年4月22日(土)～原則として第1、第3土曜日(別表参照)

○時間：AM10:00 - PM 1:00

○場所：池田教会、カール記念館1階集会室

○会費：500円(昼食代を含む)

○タイム・スケジュール

10:00～10:10 コーヒーで喉を潤して、

テーマ曲(Walk in the light)を全員で。

10:10～10:25 DVD鑑賞(1部)

Sr.渡辺和子の「心のともしび」の「キリストの香り」(DVD)と「置かれた場所で咲くこととは」(DVD)

10:25～10:30 休憩

10:30～11:15 DVD鑑賞(2部)

「アルファ・コース」(DVD)

11:15～11:20 休憩

11:20～12:20 分かち合い

12:20～13:00 食事と歓談

2017年度の年間DVD鑑賞スケジュール

No	月	日	コース	主題
(1)	4	22	Sr.渡辺 アルファ	四人目の博士 キリスト教とは？
(2)	5	20	Sr.渡辺 アルファ	幸せのひけつ イエスとは？
(3)	6	3	Sr.渡辺 アルファ	夜は近くにあり イエスの死とは？
(4)	6	17	Sr.渡辺 アルファ	善く生きるために 確かに信じるには？
(5)	7	1	Sr.渡辺 アルファ	人間理解について 聖所を読むには
(6)	7	15	Sr.渡辺 アルファ	聖書を持って生きる 神に祈るとは
(7)	9	2	Sr.渡辺 アルファ	祈り 神の導きとは？
(8)	9	16	Sr.渡辺 アルファ	天との契約 聖霊とは？
(9)	10	7	Sr.渡辺 アルファ	傷とキリスト 聖霊の働きとは？
(10)	11	4	Sr.渡辺 アルファ	はじめましょう 聖霊に満たされるとは？
(11)	11	18	Sr.渡辺 アルファ	まわり道をして 悪に対抗するには？
(12)	12	2	Sr.渡辺 アルファ	きらめき イエスを伝えるには？
(13)	12	16	Sr.渡辺 アルファ	友情 神の癒しとは？
2018年				
(14)	1	20	Sr.渡辺 アルファ	日々のつとめ 教会とは？
(15)	2	3	Sr.渡辺 Sr.渡辺	潤い 人生を最高に生ききるには？
(16)	2	17	Sr.渡辺 Sr.渡辺	チャンスを生かす、謙虚さ、 自信、健康の秘訣
(17)	3	3	Sr.渡辺 Sr.渡辺	人生は学び、楽観主義、 今日を生きる、病氣
(18)	3	17	Sr.渡辺 Sr.渡辺	人生の旅、愛の実践、 壁を乗り越える、くじけない

2018.04以降のスケジュールは2018年度にお知らせします。

福音宣教委員会

五島列島巡礼記

学校のカトリック研究会の巡礼で3月19日から22日に五島列島へ行った。恥ずかしながら私は五島列島における迫害と殉教の歴史を巡礼の事前学習で初めて知った。みなさんご存知の通り禁教が解かれた後、信徒たち自身の手によって数多くの教会堂が建築されたのが五島列島だ。四日間のうちの1日目は移動のみでその晩は福江島の福江教会に泊まった。

2日目に福江島の9教会を巡った。あいにくの雨模様で引率の先生の1人はシャッターチャンスがないと残念がられていたが、私はすこし違う感じ方をしていた。暗い雲の下、雨と強風の中、海から浮かび上がる島影。私の目には映画「サイレンス」のあの景色にしか映らなかった。何に対してかはわからないが一人レンタカーの車中で恐怖を抱いていた。5つの教会でロザリオの祈りを皆で1連ずつ唱えた。四旬節ということもあり、苦しみの原義を皆で祈った。イエス様の受難の苦しみ、殉教者たちの苦しみを想った。そしてもう一人、祈る時に思い出された人がいた。それは松本神父様だった。その日に着たTシャツが神父様のお下がり(遺品)だったということもあつたろう。棺の中の神父様の驚くほど痩せこけた頬は今も忘れられない。改めて「なぜ正しい方が正しいゆえに苦しむ羽目になるのか」ということについて想いを巡らした。何度考えても結論は出ない。「正しいからこそイエス様と同じような苦しみに遭うことができるというお恵み」と捉えるべきなのかもしれない。そう考えることもあるが何かしっくりこない。結局いつも「わからない」という言葉が残る。

3日目には福江島から牢屋の窄の殉教地がある久賀島、若松島、中通島、石造りの教会で有名な頭ヶ島へと移動した。牢屋の窄の殉教地では12畳の牢に200人近くが詰め込まれ、排泄はその場で、食事は朝晩の芋一切れずつという凄惨な拷問が明治政府によって行われた。死を突きつけられても棄教しないのはなぜなのか。棄教すると命より大事なものを失うからであろう。泣く泣く棄教した人がそうではないということではないが、主を否定することは自分の存在を否定することになると考えたからだろう。「主の存在なしには自分は存在し得ない。」正に信仰であろう。一方我々は大丈夫なのだろうか。絵踏みを拒否できるかというようなやや現実離れした話ではない。自分の存在が主なしでは成り立たないと感じられているだろうかということだ。日曜日に聖堂に行き、周囲に合わせて立ったり座ったり、手を合わせて、口先

だけで祈りを唱えて、友人と他愛もない話をするだけになっていないか。日曜日にいつものように集まれるのはなるほど主のお導きであろう。しかしそれを主のお導きだと感じられているだろうか。そう考えると自分の生活に自信は持てない。

私は五島列島で多くの美しい教会堂を見て、美味しい海の幸をいただき、とても楽しかったことには間違いはない。しかし同時に自分の信仰生活の見直しの必要を感じることができた。そういう意味でもとても素晴らしい巡礼旅行だった。

S.K.

池田・日生合同黙想会のお知らせ

6月6日(火)に池田・日生合同黙想会を開催します。申し込み方法と詳細については別途お知らせします。

指導 グイノ神父様(武庫之荘教会)
場所 売布黙想の家
費用 1000円

研修委員会

回勅「ともに暮らす家を大切に」を読んで

その2

大野

(80) 発展を必要とする世界を創造なさることで神は、ある意味ご自身を制限しようとなされたのです。それは、わたしたちが悪、危険、苦しみの源と考える多くのものを、創造主に協力する働きにわたしたちを引き入れるための、現実における生みの苦しみの一部にすることによってです。神は、被造物の自律性を妨げず、それぞれの存在に親密な仕方でも同居られ、それによって、地上の出来事には然るべき自律性が生じる余地が用意されています。こうした神の現存は、それぞれの存在と成長を保証するものであり、「存在を授けるという働きの連続」なのです。神の霊は宇宙を可能性で満たしておられ、それゆえ、ものの本質そのものの深みから、何か新たなものが恒に生じ得ます。「自然はある種の技芸、すなわち、物に刻み込まれ、物を明確な目的へと動かす、神の技芸に他なりません。…」

(81) 進化の過程を前提とするにしても、人間は、他の開放系の進化に依っては十分に説明できない独自性を有しています。人間であるわたしたち一人ひとりは一個人としてのアイデンティティを持っており、他者との、そして神ご自身との対話に入ることができるからです。物理学や生物学の領域を超え出る独自性のしるしであり、物質界における人格的存在の出現に伴う質的に純粋な新しさは、神の直接的行為、および、命への招き、そして「汝」ともう一人の「汝」とのかかわりへの(実存的な)個別の招きを前提とします。創造に関する聖書記事は、客体の範疇には決して還元されない主体として人間一人ひとりを見るよう、わたしたちを招いています。

(82,83) 人間以外の生き物たちと他の被造物も復活されたキリストが全てのものを抱き照らして下さっている超越的充満の中にあり、人間の中に人間以外の被造物の究極的目的を見つけだすことができないことを知り、わたしたちと共に前進し、またわたしたちを通して、共通の到達点である神へと向かっているのであって、知性と愛を授けられ、キリストの充満に引き寄せられている人間は、全ての被造物を創造主の下へと連れ戻すよう召されています。

(84) しかし、わたしたちの神との友情の歴史は、いつも、濃密な個人的な意味を帯びた個別な場所と常

に結びついています。場所を思い出し、またそうした記憶を思い返すことは、わたしたち皆にとって大いにためになります。丘陵地帯で育った人、泉の傍らに座ってはそこから飲んでいた人、外に出て近所の広場で遊んだ人なら、誰にとっても、そうした場所に戻ることは、何かしら本当の自分を取り戻すいい機会です。

(119) 逸脱した人間中心主義を批判する際、人格間の諸関係の重要性を低く見積もってもいけません。キリスト教思想は人間を、他の被造物を超える格別の尊厳を有するものとして理解しており、それゆえ、一人ひとりを重んじ他者を尊重するように説いています。それぞれが、認識すること、そして対話に参加することのできる「汝」である他者に開かれてあることは、人格として貴さの源泉であり続けています。ですから、被造世界との正しいかわりを守るためには、他者への開きというこの社会的側面も、神である「汝」への開きへという超越的次元も軽視してはならないのです。他者との、そして神とのかかわりから隔絶した環境とのかかわりなど有り得る筈ありません。

(143) 自然と言う遺産と同様、歴史的、芸術的、文化的な遺産も脅威にさらされています。それぞれの場所の歴史、文化、建築物を取り入れて、その場所固有のアイデンティティを維持する必要があります。こうしてエコロジーはまた、人類の文化財の保護に、その最も広い意味において、積極的に関与します。より明確に言えば、エコロジーは環境問題の研究に当たって、専門的な科学言語と民衆の言語との対話を大事にし、地域文化により大きな関心を払うよう要求しています。文化は、過去からの継承以上のものです。それは、何にも増して、生き生きとした、動的な参加型の今ここにある現実であって、人間と環境とのかかわりの思考にとって外すことのできないものでもあるのです。

(155) ヒューマン・エコロジーは、もう一つの深遠な現実をも含意しているのが示されます。すなわち、人間の自然本性に刻まれていて、より尊厳ある環境の創造のために欠かすことのできない道徳法と、人間の生とのかかわりです。教皇ベネディクト十六世は、「人間にもまた、尊重すべき自然本性、ほしいままに操ることのできない自然本性がある」という事実に基づいて、「人間のエコロジー」について語りました。これに関してわたしたちが認めるべきことは、わたしたちは、自分たちの身体そのも

のによって、環境との、また他の生き物たちとの、直接のかかわりの中に置かれているということです。わたしたちの身体を神からの贈り物として受け入れることは、全世界を、御父からの贈り物として、また、わたしたち皆が共に暮らす家として、迎え入れまた受け取るために極めて重要な事です。これに反して、自分の身体に対して絶対権力を有していると思いなすことは、被造物に対して絶対権力を有していると思いなすことへと、しばしば巧みに変化するのです。自分の身体を受け入れ、大切に、その十全な意味の尊重を学ぶことは、真のヒューマン・エコロジーに不可欠の要素です。また、他者との出会いを通して自分自身を確認できるようになるには、自分の身体をその女性性あるいは男性性に於いて尊ぶことが必要です。

(219) 孤立した個々人は、功利主義的な考え方を避けるための力と自由とを失って、社会的あるいはエコロジカルな自覚を妨げてしまう非論理的な消費主義の餌食になってしまう可能性があります。社会問題は、個人の善行の積み重ねによるばかりでなく、共同体のネットワークによって対処されねばなりません。永続的な変化をもたらすために必要とされるエコロジカルな回心はまた、共同体の回心でもあるのです。

(206) ライフスタイルの変化は、政治的、経済的、社会的権力を振るう人びとに働きかける健全な圧力をもたらしました。それは、消費者運動が、特定製品の購買や使用の拒否によって実現していることです。このことは、消費者としての社会的責任の自覚が強く求められていることを示しています。物を買うということは、つねに道徳的な行為であって単なる経済的行為ではないのです。

(216) 霊であるいのちは、肉体から、自然から、あるいは世の現実から切り離されることなく、それらの間で、それらとともに、私たちを取り巻くすべてのものとの交わり後にあるにも拘わらず、キリスト者は、

神が教会に授けた霊的宝を、必ずしも生かし豊かにしてきたわけではないということを認めざるをえません。

(221) 信仰の確信は、個々の被造物が神に属する何かを映し出しており、わたしたちに届けられるべき何らかのメッセージを有しているという気づきと、この物質界をその身に受けたキリストは、復活した後、今なお、存在するすべてのものをご自分の愛で包み、その光をもってそれぞれの内部に入り、全てのものに対して親密な存在であられるという安心感とを包んでいます。

(222) 多様な宗教的伝統に、また聖書にも見出せる、古来の教訓を思い起こす必要があります。それは「より少ないことは、より豊かな事」という確信です。事実、新たな消費財がひっきりなしに氾濫し続けることが、心を惑わし、一つ一つの物事や、一瞬一瞬の時を大切にできなくしてしまいます。他方、たとえそれがどんなに細やかなものであっても、一つ一つの現実に着いて臨むことは、他者の理解や自己実現という遥かに大きな地平へとわたしたちを開いてくれます。

人生の中で与えられる可能性に感謝するために、自分が所有するものへの執着を捨てるために、ないことを悲しみ挫けることがない様に、小さいことに立ち止まってそれを味わえるようにしてくれる、あの素朴さへ立ち返るということです。それには、支配の力学と、また単なる快樂の蓄積とを避けることが求められます。

(223) そうした節欲は、自由にそして意識的に生きられるならば、解放をもたらします。それは、劣った生き方でも、刺激に欠けた生き方でもありません。それどころか、それは生を全うし、喜びを見出し、心を豊かにする生き方です。

(225) 自分自身との和解することなしには、幸いな節欲を養い育てることのできる人はいません。

(完)

4月のガラスケースのことは

聖書にも、「主を信じる者はだれも失望することがない」と書いてあります。
「主の名を呼び求めるものはだれでも救われる」のです。

ローマ10 11、13

ダニエル神父様の訃報に接して

主のご復活おめでとございます。

復活の主日に先だつ聖週間を教会の聖堂で身が引き締まる思いで過ごした。2、3列目の席に座していたのですが、復活徹夜祭が終わった時には、新しく洗礼を受けた3名の顔は一樣にほっとした表情が見えた。そのすぐ脇で畠 基幸神父さんは緊張を解かれて、頭を下にして大きな息をされているのが見えて、とっさに「お疲れでしょう」という言葉が口から出た。聖木曜日と聖金曜日に続いて、2時間半の長丁場をずっと主役を務められたのだと改めて思った。

4日後の19日(水)に千里中央駅で知り合いの信徒から声をかけられた。16日の復活の主日の朝に主任司祭のダニエル・クエンガ・カンバタ神父様が千里ニュータウン教会の司祭居室のベッドで息をせずに横たわっているのが発見されたとのこと。

ダニエル神父様は出身地のアフリカのコンゴから1992年に大阪教区の司祭として務め始め、年齢は58歳であることを知る。翌々日に心不全による突然死であることを畠神父さんから知らされる。なんという痛ましいことでしょう…。ダニエル神父様は壮年期にあり、決して若くないのに、異国であるというハンディをものともせず、全身全霊で四旬節と復活節を乗り切られていたのでしょうか。

教会のメンバーが司祭様方を支援する余地がないかをいつも見直して、同じようなことが続かないように祈りましょう。

広報委員会 大野



北摂地区中高生
交流会(玉造教
会)におけるダニ
エル神父様
(2016.09.19)

5月はマリア様の月

表紙の絵は「ベルヴェデーレの聖母」もしくは「牧場の聖母」と呼ばれているラファエロ・サンツィオの作品。1506年制作の油彩で、ウィーン美術史美術館所蔵。聖母マリアに支えられて立つ幼子イエスが、聖ヨハネの持つ十字架の頭部を握っている。

宝塚黙想の家から

黙想会のお知らせ

■日帰り黙想会 指導:山内十束神父

5月25日(木) 10:00 ~ 15:30

5月26日(金) 10:00 ~ 15:30



■週末黙想会 指導:山内十束神父

5月20日(木) 17:00 ~ 5月21日(日) 15:30

黙想会、費用等のお問い合わせは

「宝塚黙想の家」まで。☎0797(84)3111

編集後記

4年ぶりに澤田豊成神父の講話はガードを固くして自分を守らなければならない私を開放して、神や他者へ向かわせてくれました。いつもは閉じていて、一人語り(モノローグ)になりがちで、ありのままの自己を隠すかのように、身の丈に合わない大きな世界観に頼って、言葉による分かち合いや経験の共有に踏み出せないのに、澤田神父は神に向かうように、恵みを頂くように勧めてくれます。故松本一宏神父は同じように、私にとっては、成長過程で作上げた多様な心身の主体性を隠さずに、言葉や身体動作を曝して良いよいつも鼓舞してくれました。

独人語りの(モノローグ)と違って対話(ダイアログ)では発声者(A)と聞く者(B)は交互に入れ替わります。Aの声はBとは異なる声でBに響くだけでなく、Aにとっても自己の再確認の声として残り、入れ替わって、Bの発声がAとBに響きます。二人の境界に異なる4つの声からなる多声(ポリフォニー)空間が生まれ、二つの物語が生まれます。同じ内容とは限らない物語を言葉によって分かち合いして、二人で協力して行動を起こすなら、その経験が共有されて、頑固な自己から脱出できたり、襲ってくる不安や社会からの疎外感、絶えることがない罪意識を二人で支え合うことができます。

「ポリフォニーの世界を旅する教会」には様々なダイアログが不可避です。地域のカトリック教会にはモノローグが多いですが、四旬節の福音と澤田豊成神父との懇談の中にダイアログを見つけられました。
インマヌエル